

第4回
台東区基本構想策定審議会

日時 平成29年11月21日

会場 台東区役所10階 1001会議室

台東区企画課

○出席者 (25人)

会長	懸田 豊	副会長	吉川 徹
委員	安島 博幸	委員	有村 久春
委員	宮崎 牧子	委員	西 智子
委員	伊藤 正次	委員	本目 さよ
委員	小坂 義久	委員	早川 太郎
委員	秋間 洋	委員	石塚 麻梨子
委員	河野 雄太	委員	成田 多恵子
委員	守屋 有晶	委員	山藤 弘子
委員	黒田 収	委員	小田切 満寿雄
委員	早津 司朗	委員	安倍 智
委員	佐々木 聡	委員	牧田 としみ
委員	野坂 羊子	委員	峯岸 由美子
委員	石原 喬子		

○欠席者 (5人)

委員	片山 泰輔	委員	山谷 修作
委員	太田 雅久	委員	二木 忠男
委員	富士 滋美		

○事務局

企画財政部長	佐藤 徳久
用地施設活用担当部長	望月 昇
総務部長	石野 壽一
国際・都市交流推進室長	中沢 陽一
区民部長	齊藤 充
文化産業観光部長	河井 卓治
教育委員会事務局次長	田中 充

会計管理室長

西 島 久 雄

企画課長

前 田 幹 生

財政課長

酒 井 ま り

情報システム課長

飯 田 辰 徳

(午後7時00分 開会)

1. 開会

○会長

それでは、これより第4回台東区基本構想策定審議会を開会します。本日はご多用の中お集まりいただきましてありがとうございます。開会に先立ちまして、本日の配布資料及び委員の出席状況について、事務局から報告をお願いします。

○事務局

—配布資料及び委員の出席状況の報告—

○会長

次に傍聴についてです。本日の傍聴希望者はおりますでしょうか。

○事務局

現時点で傍聴の申し込みはございません。

2. 議題（1）基本構想検討シートについて

○会長

それでは、本日の議題に入りたいと思います。資料1から資料4-2まで事務局よりご説明いただき、その後分野ごとの質疑応答に入りたいと思います。それでは事務局より基本構想検討シートの説明をお願いいたします。

○事務局

—基本構想検討シート（観光、生涯学習、教育、パートナーシップ、行政経営）の説明—

○会長

ありがとうございました。それでは質疑応答に移りたいと思います。まず資料1の観光分野の検討シートについてご質問等あればお受けしたいと思います。いかがでしょうか。

<観光分野について>

○委員

基本構想検討シートには、「観光客数は増やすものだ、また観光消費額ももちろん減っているから増やさなければいけない、誘客しなければいけない、再来訪を促さなければいけない」というように、基本的に観光客を増やす方向に課題があると記載されています。もちろん日本の産業として観光が重要であることは認識していますし、今後もそうであろう

と思っているのですが、台東区としても観光客を増やす方向が20年後の望ましい姿という認識で合っていますか。

○文化産業観光部長

国でも2020年に向けて4,000万人の観光客、その10年後には6,000万人の観光客の受入れを政策目標として打ち出しております。台東区としても、観光客が増えることは、にぎわいの創出や地域経済等に寄与するものと思っております。国の流れも含めまして、今後も観光客が増えていくことは間違いないと考えられ、その中で台東区も対応が必要になるかと思えます。ただ、委員がおっしゃいますように、「単に観光客を増やせば良いのか」、「そのことが果たして区民生活にどう還元ができるか」といった観点では検討が必要です。特に外国人のマナーの問題もあります。他にも、京都などでは観光客が多過ぎて一般市民がバスに乗れない、あるいは民泊等の問題もありますので、量的なものだけでなく、質の部分についても検討していきたいと考えております。観光客が増えること、外国人の方が増えることによって区民の方が台東区に対して誇らしく愛着を持っていただくとともに、またそれが産業に結び付けば良いと、少し総論的な話になってしまいますが、そのように思っています。

○委員

ありがとうございます。増やせば良いというだけではないと聞いて安心しましたが、観光客が増えることによるマイナスの影響もあると思います。私の地元は谷中で、谷中の町は住宅地です。しかし、最近では、観光客の方が入り込んで、路地が良い、風情が良いということで、一般の民家の写真撮影をしてしまうこと等も起きております。ですから、誘客ももちろんなのですが、その誘客によって生じる課題のほうもしっかりと取り組む必要があるという点だけ申し上げておきます。

○会長

ありがとうございます。例えばこのままのトレンドでいったら10年後に何人ぐらいの観光客数になるのか、そのときにこの狭い区域の中にそれだけの観光客が来たらどのような問題が発生するかということを、逆算してお考えになるというのは当然なさると思えますが、予測はされているのですか。

○文化産業観光部長

当然増えることは予測していますが、数値的なところはこれからの算定になると思いません。

○委員

量か質かということは、これから小委員会で議論していくべきことかと思えます。都の方針の中に、消費拡大に向けた観光経営という項目があります。この中で、日本の観光は高額消費をするラグジュアリー層を取り逃がしているのではないかということが話し合われています。ただ数を増やすだけではなく、もう少し欧米等から所得の高い人たちを呼ぶべきではないか、というような議論もなされています。台東区に、観光客数はもう十分来ていると私は認識しております。都では、昨年は2,400万人ですが、今は順調に進んでいまして、今年度は2,800万人になるという見込みです。消費拡大に向けた観光経営ということがありますが、その中でどのような層に向けて、どのような方策を取っていくのかということ、これから考えていくべきかと思えます。

それから、もう一つ都の方針で、「MICE誘致の新たな展開」ということが書いてあります。一方で、台東区のところにはMICEという言葉が出ていません。このMICEを引き受けるには、会場の問題などいろいろありますが、MICEに対してどのような姿勢でいくのか検討する必要があるかと思えます。社寺や美術館を使う「ユニークベニュー」や、レセプション・分科会を開くなど、台東区が持つ資源の中には、MICEに活用できるものが随分あるのではないかと考えています。

それから、都の方針には、「日本各地と連携した観光振興」という言葉が入っています。これは多くの観光客がくる東京が一人勝ちのような感じで、周りの県には全然人が行っていないというような状況です。それと同じような構造で、都内では台東区にはたくさん人が来ているのですが、もう少し周辺との連携ということを考えていくべきかと思えます。台東区は、舟運で二天門の防災船着場を開放する等、非常に先進的な取組みを行っています。今いろいろなところで舟運が大きなテーマになっておりまして、台東区と他のところが結びつくことによってお互いにメリットがあるかと思えます。観光客は、区境はあまり意識しないで動いていると思います。谷根千や秋葉原は三つぐらいの区が関わっています。その他連携すべきところは墨田区などが挙げられます。スカイツリーをつくる時に、このまちづくりは墨田区と台東区で一緒にやって、スカイツリーのメリットを生かすべきだということで、墨田区の今の場所に決まった経緯もあります。台東区では、浅草文化観光センターなど、多くの施設がスカイツリーに合わせてできたわけです。一方で、スカイツリーの集客力が落ちてくることを見越して、全てのカードを切りませんでした。幾つかやり残して、次のときにやろうというようなアイデアがあったはずですが、そのようなものを実践に移して、スカイツリーのある地区との連携をさらに深めていく必要があると思っています。

○委員

なかなか難しい問題だと思いますが、区の抱える課題に、②観光客の再来訪を促す取組みが必要となっているという反面、いわゆる観光客が訪れることで発生するマイナスの影響

響として、区民と観光客との相互理解という問題があります。平成28年度の調査でも、日本人観光客ならびに外国人観光客が台東区で残念だったこととして、人の多さということが挙げられています。上野、浅草、谷中などの特定のところに観光客が集まる現状について、人の流れを今後どのように分散させていくかということが非常に大切になってくると考えます。次の20年を踏まえてしっかり議論をお願いしたいと思います。

○副会長

今のお話と少し関係しますが、私どもの大学では東京都の島々の振興をお手伝いするプロジェクトを行っています。東京都の島々は観光客が大勢来た時代がありましたが、その後、人が来なくなりました。大勢来て、潮が引いたようにいなくなることはあり得ます。台東区では、観光資源を食いつぶさないように、じわじわと良くしていく、そのようなことができると思います。例えば谷根千などは実に良いと思います。良過ぎて人がたくさん来るのも困りますが、先ほど委員から意見があったように、人を分散させるには、歩けるまちづくりが非常に効果的だと思います。都市計画上、最近歩けるまちづくりが非常に大事だといわれます。それは前回審議した健康の立場からすると、歩けるまちのほうが確実に健康上豊かであるということは、アメリカではエビデンスがたくさん出てきています。

回遊性を向上させて分散させるためには、バスでのまとまった移動ではなく、適宜いろいろなところを回っていただけるようにばらけさせる。そのような点では台東区は、平らなところが多いため非常に良いところですが、ただ、都市計画上私どもが見ていると、まちを歩く上でバリアが少なくないのかもしれませんが、歩いて回遊できようなまちをつくるといういろいろな問題が解決できます。この基本構想検討シートに書いてある相当多くのものについて、観光を含めて、歩いて回遊できるようなまちづくりを進めることは恐らく良い効果を得ることができますので、総合的な観点からぜひ入れていただければと思います。

○委員

今、仕事で日本堤のほうにありますがゲストハウスのオーナーさん等に日本語を教えに行くという機会が増えています。日本堤や蔵前、浅草橋、浅草等には、小規模なゲストハウスがとても増えています。そのようなところに滞在されているお客さんの話を聞きますと、ほとんどリピーターの方です。短い方では1週間、または1か月から3か月の間台東区の安宿に泊まっています。そうした方が何をしているかというと、やはりまち歩きだそうです。お話を聞いたところ、浅草や西浅草のほうにある喫茶や銭湯を巡ったり、台湾の方で浅草に日本舞踊を習っていたりなど、毎年同じ時期に長期滞在している方ばかりです。台東区に長期で滞在する方はほとんどリピーターで、ゲストハウスもいつも満室という状態だそうです。

先ほどお話がありましたように、歩けるということがまちの大きな魅力のようです。私

も台東区民ですが、町でお年寄りの方もよく道を聞かれて答えたりしている状況は、この区の良さだと思っています。

そのゲストハウスの経営者たちから話が出ていたのですが、この前浅草の隅田公園のところで月と一緒に紅葉を見るというイベントをやっておられました。ゲストハウスに泊まっているお客さんは、どちらかというとな米の方や、アジアでは台湾やシンガポール、香港の方で、ただ買い物をしに来ている方ばかりではありません。区では面白いイベントをたくさんやっているの、区にあるゲストハウスと提携し、区のイベント情報をニュースレターなどで配信していただけたら良いと思います。毎回「区のホームページを見てください」と伝えているのですが、見逃してしまうようです。また、ゲストハウスの皆さんは、ブログなどのいろいろな手段で台東区の面白さを発信しているそうです。ぜひ台東区とゲストハウスが提携して取組みを進めてほしいです。私も子育てする際にお世話になったのですが、区の子育て支援のお店の前にステッカーが貼ってあって、そこでカードを見せると何割引になるという事業があります。同じように、きちんと管理しているゲストハウスに区の提携宿というステッカーを貼らせてもらうなどして、そのようなところと連携して区の面白いイベントをやっていただくと良いと思います。そのときには、きちんとごみが出せている宿なのか、騒音を出していないかなどの基準を必ず設けていただくことで、区である程度管理できると思います。

それから、私の住んでいる鳥越で「モノマチ」というイベントがあって、ものづくりをしている小規模の事業者さんのところにスタンプラリー形式で回って、ものづくりを見学する仕組みがあります。それを外国人の方に紹介すると、「そのようなすごいものを行っているのか」ととても喜ばれています。そのような区民向けの情報をぜひ外国人の方にも、ニュースレターのようなかたちで発信していただけたらと思っています。

もう一つは、これだけ観光客が来ている区はなかなかないと思います。小学校では生活科という自分の区や町を調べようという科目があります。台東区の子ども独自の取組みとして、生活科の教科の中で自分の町のガイドブックをつくってみよう、つたない英語でも良いから浅草を案内してみようなどと、国際化を見据えて教育とも関連づけられるのではないのでしょうか。観光で来ている外国人の方たちに対する子どもたちのおもてなしなどで、生きた英語の必要性を感じたり、自分の区や国がどれだけ良いものを持っているかを再確認したりする機会にもなりますので、ぜひ小学校や中学校の教科に入れていただけたら良いと思いました。

○委員

先ほどマナーの話がありました。「外国の方に、日本に来てマナーを守れと言っても無理だ」と皆さんおっしゃいます。皆さんが努力して、このように美しいまちづくりをやっていても、ごみの捨て方の悪さやタバコの吸い殻などでまた元に戻ってしまい、本当に迷惑しています。今もやっていると思いますが、「日本はこのような国だからしっかり守っても

らわなければ困る」、「日本はそれだけ厳しいところがある」、ということその国に徹底的に言う方法しかないと思います。

それから、私の想像ですが、日本はどの国よりも食事が美味しいです。それが日本の素晴らしいところではないかと思っています。日本人は親切で優しいという人間性や、日本に来ると何でも美味しい、だから自然にまち歩きになる、そのようなところが日本の特徴です。そのようなところを考えてやったほうが良いと思いました。

○会長

ありがとうございます。観光についてはまだいろいろあるかと思いますが、ぜひ小委員会のほうで検討をお願いします。部長から何かございますか。

○文化産業観光部長

いろいろなご意見をいただきましてありがとうございます。ラグジュアリー層のことやMICEのこと、墨田区との連携や舟運、まちづくりと観光の部分、情報発信の部分、マナーの部分など事業の案としてずっと考えていることもかなり議論として出ました。小委員会の中で話すべき課題がたくさんありますので、私どもとしても一生懸命取組んでまいりたいと思います。

<生涯学習分野について>

○会長

次に、生涯学習分野に移りたいと思います。この生涯学習分野につきまして、何かご質問はございますか。

○委員

平成29年から平成33年を期間とする生涯学習推進プランの改定作業がありまして、そちらにも参加させていただきました。本日の配布資料では、区の抱える課題、課題解決に向けた取組みの方向性について、スポーツをメインに書かれている部分が多いです。生涯学習はとても幅が広いものですから、スポーツだけではないということをお伝えしたほうが良いかと思いました。

生涯学習推進プランの改定作業では、多様化する区民ニーズへの対応、区民の学習の促進と成果を活用できる環境の整備、生涯学習を通じた地域課題解決をどう支援していくか、あるいはICTを活用して、どのように生涯学習を推進するシステムを確立するかというようなことが課題として挙げられます。それを解決するような取組みとして、例えばまだ仮称でアイデア段階ですが、区民カレッジのような総括的なプラットフォームを設置して、一面ではなく多面的なネットワークで区民の皆さんが生涯学習に関われるような場が構築できたら良いのではないかというアイデアも出ていることをお伝えしておきます。

○教育委員会事務局次長

今委員がおっしゃったとおり、区民カレッジが今回の計画の中にありまして、鋭意検討しているところです。生涯学習センターが建てられたときから今まで、教育分野、生涯学習、社会体育、社会教育という分野でやってきたセミナーの他にも、いろいろな分野でセミナーがありますので、包括的に情報提供して生涯にわたる学習として位置付けていこうと取組んできました。今後、それをどう生かしていくのか、学んだことを生かし、活躍する場につなげて、協働していくような仕組みをつくろうということで今鋭意検討しております。

○会長

スポーツに偏っているのではないかということについては事務局のほうはいかがでしょうか。

○教育委員会事務局次長

今委員がおっしゃった部分は、項目数としてはこのような挙げ方になっていますが、生涯学習の内容としては非常に幅が広いものです。また逆に言うと、生涯学習は全体を包括しているので、その中のスポーツ分野というような見方もできると考えています。障害者スポーツなど、いろいろな動きがある中で、このような整理になります。基本構想の中では、生涯学習にはさまざまな分野があり、スポーツや文化という各論があるというような位置付けであることには変わりありません。

○会長

ありがとうございました。人口構成、年齢別の構成などが20年間で変わっていくわけですから、それを見据えた生涯学習の施策の方向性をつくっていただければと思います。

○委員

生涯学習というのも教育に非常に関わりがあります。

一つ提案をしたいのですが、台東区の場合は、地域的にも人口的にも、ある意味で非常にまとまった区だと理解しています。区民の文化度も非常に高い資質に恵まれているところですので、先ほどの区民カレッジのような発想でも良いと思いますけれども、学習リーダーを区が任命し、マイスターのようなリーダーを育てて、区民が自分たちで文化や芸術、スポーツをつくっていく、そして楽しんでいく、そのような仕組みができそうな気がします。客観的に見て、区民が持っている知的財産や文化的な財産が眠っているような気がするわけです。上野の山や浅草のような、国際的な非常にレベルの高いものを活用して、区民が学んでいく、それを他の人にも教えていく、そのように区民同士がチームをつくってお互いに学ぶような仕組みが何かできないものかという気がします。その辺りをこの分野

で知恵を絞っていただいて、台東区では文化や学びができて非常に嬉しい、楽しいという知的財産というものがお互いにつながっていく、そのような台東区ができるのではないかと期待しています。これは教育分野のほうからもアプローチしたい部分でもあります。

○教育委員会事務局次長

今まで青少年の取組みで青少年リーダーなど、いろいろそういった仕組みがある中で、また新しい動きとして区民カレッジの検討もあります。そのような中でリーダー的な存在を育て、生涯学習が促進される仕組みについて、鋭意検討していきたいと思います。

<教育分野について>

○会長

それでは次に教育分野で、何かご質問はございますか。

○委員

私が今いる小学校に、昨年子どもクラブが開設されました。台東区は小学校が19校ありますが、子どもクラブが全然足りていない状況です。今後は19校に展開されていくというお話をいただいているのですが、児童数が今後増えていく中で、子どもクラブが全く設置される環境にない学校がほとんどだと思います。私の小学校は石浜小学校ですが、今児童数が少ない状態で、モデル校として子どもクラブが学校の中に開設され、保護者の方たちからとても助かるという意見をたくさんいただいています。実際、今後児童数が増えていくという中で、学校によってはどうしても教室が足りないという場合があるかと思います。そのようなところはどうか考えているのでしょうか。

○教育委員会事務局次長

今ご指摘があった子どもクラブが足りないという状況についてですが、子どもクラブというのは、保護者の方が就労していることなどを要件に審査をした上で入会を決めて、必ずスペースを確保し、人材もそろえて受け入れる体制を整える取組みです。子どもたちの居場所を確保するという意味では、保護者が就労しているかどうかにかかわらず、地域のつながりも薄まっている中で、安全かつ安心して過ごせる場所をつくるには、固定した場所という考え方ではなくても、例えば校庭や体育館、図書室など、学校の放課後に使えるさまざまな場所を使って、子どもたちが集まって、学習や遊び、レクリエーションあるいはスポーツなど、事業としてやっていくことも検討したいと思います。固定した場所を必ず確保するというでいくと、子どもクラブには色々なハードルがあります。そのような中で総合的に進める、また児童館との連携も含めて検討していくことで、全体として子供たちの居場所の確保に対応していけるのではないかとということで鋭意進めています。子ども教室と申しますが、保護者の就労の有無にかかわらず利用できる施設について、全校

で展開したいということで、今方針づくりの中間のまとめが終わったところです。今後また具体化に向けては学校とよく相談をして、やり方についても学校ごとに状況が違いますので、その辺は丁寧に進めなければいけないと思っていますところです。

○委員

ありがとうございます。観光分野と関連するので少し戻ってしまいますが、観光バスによる交通事故の問題があります。私はPTA会長3年目なのですが、その3年間の中で1名の子どもが亡くなり、3名が怪我をしました。10年後20年後というのはもちろん重々承知なのですが、次に事故が起きてからでは遅いと思います。駐車場が増えることも大切なことだとは分かりますが、もともと駐車場がないところに観光バスが来るから、皆路上に駐車するわけです。そのようなところで実際に事故が起きているということをよく頭に入れて、小委員会のほうで議論を進めていただきたいと思います。

○会長

観光バス対策は区のほうでも計画していらっしゃいますか。

○事務局

区では、観光バスの関係で条例を制定したり、観光バス対策の計画を設けたりしています。具体的には乗車場、降車場を指定し、事前に予約をした観光バスを受け入れるというかたちを取るというような対策を現在進めています。駐車場等の確保につきましても、引き続きその対策の中で検討していくということになっています。

○委員

前回の基本構想ができてから十数年のうちに、社会的に一番変わったことは何かというと、ICTの活用だと思います。スマートフォンの普及率もとても高くなっていて、SNSに関しても大人から子どもまでいろいろ活用するようになっていきます。今まで情報というのは、例えばテレビのニュースや新聞など、ある程度裏付けが取れた情報がメインでしたが、誰しもが発信できるようになったことによって、情報の量も圧倒的に増えていきますし、情報の真偽に関してもボーダーラインがとても下がってきています。多分今後もより一層便利なものが出てきて、より情報があふれていくようになるのだらうと思っています。これは別に子どもたちだけという話ではないので、生涯学習にも関わるのかと思っています。

そのような膨大な情報を、どのようなかたちで自分の中で判別し、どう活用していくか、また自分が発信者となったときに、どう発信していくのか、まさにメディアリテラシーということだと思います。その辺が求められるような時代であり、さらに求められる時代が

この後来るのだらうと思います。さらに言うと、台東区だけでなく、日本全体の話になると思うのですけれども、人の多様化や、グローバル化がさらに進んできていて、良いか悪いかは別にして、国家も規制緩和を進めていっています。多分多くの方々は、行政が認めたものに関してはある程度疑いなく「このサービスは安全」、「この事業は大丈夫」と判断することが今までは多かったと思っています。しかし、来年6月15日に施行される民泊は、全部が全部悪いわけではないとは思っていますが、それでもやはり、民泊を行う人も、それを利用する人も、今までの宿泊業とは異なり、当然それぞれリスクがあったり、良さがあつたりしますので、それなりのリスクがあるということをしつかり認識したうえで、選択には自己責任が求められることを理解する必要があるかと思っています。そうすると、選択肢が増えた分、どれを選択するかという判断基準、結果それを選択したとしたら、そこにあるリスク管理も必要だというその辺の力が、この20年を見据えたときに、これから日本で生きていく人たちには必要になってくるのではないかと思っています。その辺を教育でどう対応するのかということがとても大事なのではないかと思います。これが教育になるのか生涯学習になるのかよく分かりませんが、別に子どもたちだけの話ではないと思っているので、その辺も視野に入れていろいろとお話をさせていただけるとありがたいと、意見だけお話をさせていただきました。

○会長

ありがとうございました。やはりスマートフォンをはじめとして、もうユビキタスな社会になっているということを前提として、教育という問題を考えていかなければならないだろうというご指摘かと思います。

○教育委員会事務局次長

現状だけ申し上げます。非常に重要な問題でありまして、今小学校、中学校では、スマートフォンの持参は禁止しております。また、スマートフォンの使用にあたってはルールをつくっております。日常お持ちの方が多く、それに対してどういう使い方、また保護者もどういう選定をし、気遣いをしていくかなど、その中でいろいろな悪意の勧誘や落とし穴があるということも周知しているところです。道徳の副読本の中には、今おっしゃったような情報リテラシーの課題などもあります。また今後いろいろな議論を深めていただければと思います。よろしく申し上げます。

○副会長

1点目は、これを拝見していて、小学校中学校についてどう考えるかという話が出ています。建築ですとよく、ぽっかり穴が空いているのはティーンエイジャー向けの施設であるといいます。中学生以降は、特に私立に行くので、地域から切り離されて、帰って来たらどこにも居場所がない。家は、特にマンションが建ってくると、狭くて居たくないの

す。音も出せないので、例えば楽器なども練習できません。多摩ニュータウンですと、団地をつくったときにコミュニティセンターを全部つくったので、そこがティーンエイジャーの逃げ場になっています。そこで楽器などをやっていたり、一人で勉強していたりしています。家でやれば良いのですが、そこへ行きます。

杉並区はティーンエイジャー向けのコミュニティセンターというものを打ち出しています。ティーンエイジャーに運営も任せてしまおうということもあります。台東区は下町のきちんとしたコミュニティがあるので、恐らく町内会などがこれまでやってきたことなのではないかと思いますが、だんだんマンションなどが建ってくると、多摩ニュータウンや杉並区と似たような状況になっていくと思います。そのときに、新しい施設の需要が、実はこれはどこにもはまらないのですが、あえて言えば生涯学習となります。ここには、引きこもり対策が書かれていますが、それ以外のところも実は公共がある程度手を出さなければならなくなることが、特にマンションでできたような都市の場合には生じてくる可能性があります。台東区もその方向性にだんだん向かっていきます。

もう1点、今のことと少し関係しているのですが、図書館についてです。私は大学の図書館長をしているのですが、今図書館の中で、大人数が騒ぎながら、パソコンやスマホを使って調べながら物事を勉強するというのが結構メインであって、そのために図書館の中に騒げる部屋と騒げない部屋をつくって、ガラスで仕切って見えるような状態にしておいて、ここからこちら側は騒げる、ディスカッションして良い場所というかたちにはしています。武蔵野市の武蔵野プレイスという新しい図書館は、図書館とコミュニティセンターのような機能を全部まとめて、ここからここまでは談話、ここからここは静かにすると区切っています。これは今の居場所の話につながっています。以前私がいたことがある市の図書館は素晴らしい図書館です。ここはもう古くからガラスの箱を入り口のところにつくっています。その中では子どもは騒いで良い。ガラスの箱ですから、ドアを閉めれば聞こえません。でも見えるから安全です。誰からも見えます。子どもが中で絵本を持ってきてギャーギャーとディスカッションしています。図書館自体のコミュニティへの在り方が抜本的に今見直されつつあります。ですから、図書館機能の充実と書かれているわけですが、その機能の充実というのは、恐らく機能の変換と今のような新しい都市の中での居場所の提供としての図書館やコミュニティセンターの、特に若い人向けの在り方を考えていくことが、恐らく台東区でも求められています。

○委員

先ほど観光のところでもありましたが、全ての分野で光と影があります。先ほどの観光の分野であれば、観光客が増えることと、居住環境やコミュニティがどうなのかという問題、あるいは比較的行政が光を当てなければならない公立としては採算が取れない分野で、これが負けていくというような影の部分があって、これは教育の分野も同じです。

実は先ほどあった放課後子ども教室というのは全児童対策で、これはもうチルドレン

ファーストではないのです。子どもの囲い込みでありまして、もっと多様な地域社会で過ごすことがありえます。子どもは放課後多様な図書館での過ごし方もあっても良いわけであります。

それから、変なおじさんや、おせっかいなおばさんがいるから子どもたちは地域で育つわけで、社会教育でもそうですが、これを全体として安全安心だからといって学校に全部囲い込んでいってしまうというのは、子どもたちの多様性を非常に損ないます。そのような点では危険な部分があります。しかし、子どもの保育も大事です。これも光と影の部分の両方あるわけです。

そのような点ではやはり何を大事にするか。観光の分野でも、浅草が苦しい時代はあれだけ長くあったわけで、ほとんどお客さんが来なかった。これがなぜ今観光客が増え、ここまで来たかということを引き返る必要があります。では影の部分でどうなのか、それが問われるわけです。光と影の部分のどちらを大切にするのか、もちろんここでもどこまで結論が出るかは別ですが、非常に大事なテーマだろうと思います。

教育の分野はチルドレンファーストであるべきで、親が預けたいからという需要で、それで良いのかという問題だけでなく、やはりその辺のところは、保育も大事というところ、全ての分野であります。

○委員

この教育と先ほどの生涯学習を見ていて、芸術のことがあまり出てきていません。台東区は芸大もありますし、上野学園という音楽もやっています。また、たくさん美術館もあります。どこに書いてあるかと思って、先ほど文化分野を見ていたら、文化分野のほうには生涯学習や教育という言葉が出てきません。どちらかに再掲でも良いですから生涯教育、生涯学習における文化的、芸術的分野をどこかに載せておくべきではないかと思いました。

○委員

先ほどからスマートフォンの話があり、このように良いもの、便利なものは確かにないと思いますが、歩きながらのスマートフォンなど、マナーが悪いです。それから電車に乗ると全列全部スマートフォンです。最近では中高年まで負けずにやっています。なぜ日本がこのように変わってしまったのかと思うぐらいです。

また、皆さんスマートフォンの良いところばかり言っていますが、これは医学的に一部言い始めているようですが、10代の後半ぐらいからスマートフォンの利用を始めると、大体30代40代ぐらいには痴呆症になりやすい、ということです。さらに、子供達の教育上良くないサイトを閲覧するなどの使われ方もできてしまいます。ですから、スマートフォンの使い方をしっかり教育のほうへ持っていかないと難しいと思います。

○委員

SNSでつい最近大変な事件がありました。危惧の話はそこにあると思います。本当にマナーが悪くて、電車に乗っても、今の光景は惨憺たるものです。日本人は、昔はこのようではありませんでした。これが今若者だけではなく、中高年にきているわけです。一定の規制があるべきだと私は思います。

○委員

先ほど、前の10年間から変わったとおっしゃっていますが、この2か月ぐらい上野の将来の中で話し合われていることは、フィンテック（スマートフォンでのモバイル決済などICTを活用した革新的な金融商品・サービスの潮流）への対応です。半年ぐらい前に、アリペイ（中国の電子商取引アリババグループの決済サービス）を使いませんかという話がありまして、あっという間に、日本中でこのアリペイが使えるようになりました。今は上野にあります大型店は全て使えます。非常に早く、億のお金を超えるのに1か月かからなかったという話を担当がしています。僕らは「あのようなのにはできない」、と言っていたのですが、むしろ関わらざるを得なくなってきたと思います。

どんどん変革が行われているということで、この支払方法の変革は第4次産業革命というよりも、もっと大きな産業の投資になるだろうと考えております。

○委員

いろいろな論議があると思いますが、僕らは下町生まれの下町育ちなので、昔は下町の心意気というものがありました。これはどういうことかということ、「卑劣なことはしない」、「うそはつかない」、「弱い者いじめをしない」、「弱い者がいたら助ける」、そのようなことを子どもの頃から身に付けるということをしています。例えば、スマホでも何でもそうだと思いますが、この製品をきちんと扱ってれば、他人に迷惑をかけたり、道路でやったり、そのようなことはしません。スマートフォンを使ってはいけないというのではありません。使い方を教育するというのだと思います。これこそ基本的な生涯教育だと思います。スポーツの問題にしても、アスリートをつくるというのではなく、スポーツは皆で一緒に楽しもうということが重要です。例えば私などは子どもの頃は、よく母親に怒られました。家に帰って、ランドセルを放り投げて、野球に行ってしまう。そうすると自然に仲間ができて、野球をやって、腹が減って帰って来てから勉強と言われて仕方なく宿題をやっていました。人間として当たり前のことがずっと教育に入ってきているのではないかと思います。

それからもう一つは、インバウンドに対してですが、日本人の性格がそうなのかもしれませんが、ヨーロッパでもアメリカでも行ってみると、町を歩いて目が合うと挨拶をします。でも日本人は挨拶をしません。ヨーロッパやアメリカ等の外国人は周りの人たちが全部敵だと思っていますから、挨拶をすることで安心します。観光客を迎えるにして

も、目で挨拶するような習慣が必要なのではないかと思います。いろいろ細かくたくさん書いてありますが、何か基本的なものが忘れられているのではないかと思います。

○委員

とりあえず学校教育に限って言いますと、カリキュラム編成に関しては、国の圧力がある意味ではとても強くなっています。ここ10年ぐらい学習指導要領改定のたびに圧力が強いです。多分教育委員会の皆さんも、学校を思うように台東区独自の方針で指導しきれないというところがあって、とても歯がゆい思いをお持ちだと思います。そこをどうやって乗り越えるかという課題が一つあります。

それから、教員の資質ということがあり、これは非常に大事な中身です。教員の人事も東京都がやるものですから、台東区がいじれないところがあるわけです。そのような規制の強いところが年々強まってきていますので、そこを乗り越えるような台東区の地域性、文化、芸術、それから知恵などをベースにした教育の在り方をどのように構築するかが問われるのではないかと思います。その辺りを中心に、小委員会で十分に検討したいと思っています。台東区の知恵を生かす教育をどのように20年後につくっていくのか、それを乗り越えるような知恵が欲しい、そのためにも国や東京都にもう少し規制を緩やかにしてほしいと私は思うところがあります。台東区にはそれを乗り越える知恵があるので、それを信頼してもらいたいと思うところがあります。それをベースに議論したいと思っています。

○委員

教育の今ここに出ている課題が子どもの育ち、教育というかたちですが、「子どもにはもれなく親がついてくる」という視点があります。要するに、教育の背景に子どもの問題だけを取り上げるのではなく、家庭教育、家族という背景をきちんと捉えながら、まちづくりの中に視点として置いていくということも重要なのではないかと思います。例えば引きこもりの問題なども、もちろんこの台東区の中で、家族像や家庭教育、家庭の在り方なども見据えた中で視点を持っていくことも必要です。先ほどの放課後児童の問題などは、まさしく家庭の在り方を問うものではなく、家庭がどういう状況にあらうとも、次の世代を育成していくかたちをどうつくっていくかということだと思います。そのような意味では、家族の背景をきちんと捉えつつ、その背景による差をなくしていくという視点をきちんと入れていく上での教育行政を考えていかなければいけないという意見です。

<パートナーシップ分野について>

○会長

次にパートナーシップ分野についてです。

○委員

2点お伺いしたいと思います。まず1点目が、区の抱える課題のところに人権感覚の醸成や男女平等に対する啓発活動とあるのですが、ここで資料に書いてある男女の定義は、台東区の男女平等推進基本条例で定めたとおり、全ての生物学的心理学的性ということで、LGBT等のマイノリティーの方も含むという認識でよろしいでしょうか。

○事務局

委員ご指摘のとおりです。

○委員

ありがとうございます。多くの委員の方は多分男女というと、男の人と女の人というように思ってしまうところがあると思いますので、その表記についてはぜひ検討をお願いします。もう一つ、区の現状や区の抱える課題に、男女平等というところ、パートナーシップというところで1点欠けている視点があるかなと思います。何かというと、女性議員の割合です。国の現状には、国会議員の女性割合比率が書いてあります。ジェンダーギャップ指数が2017年では114位と過去最低になったこともありました。私が見落としているのかもしれませんが、区の現状には女性議員の割合比率が書いてありません。ここを増やすのはなかなか難しいと思われるかもしれませんが、今5歳の子どもが20年後には25歳でもう立候補ができる年齢になります。そういった意味で、ここでやるのか教育でやるのかというところはありますが、政治の抱える課題に行政がどこまで取り組むかは別としても、きちんと課題認識は持つておくべきなのではないかと思いますので、ここは指摘させていただきます。

○会長

ありがとうございました。このような問題は、学校教育の中にも落とし込んでいかなければならないということもあろうかと思えます。

○委員

区の抱える課題のところに、「今後も増加が見込まれる在住外国人が地域社会の一員として協力し、生活できる仕組みづくりを推進していく」とあります。今、支援のほうをさせていただいて、外国人というと、イメージ的に支援が必要な対象というように捉えられがちなのですが、もう特別扱いをするのではなく、生活できる仕組みというのは台東区でも十分整えていただいていると思いますので、それよりも、一員として区を支えていく仕組みというようにシフトしていただけたらと思います。子どものクラスや周りの友達を見ても、10人のうち何人かが外国人とお友達になっています。ですから、「特別この人は違う」というのではなく、横一線で同じ立場として台東区を支えていく、日本人と協力して共に

区を支えていく一員としての仕組みづくりを考えていけたら良いと思っています。

先ほどお話がございましたように、子どもと家庭教育は結び付くと思います。子どもが日本に連れてこられて、親が中国で受けてきた教育と、子どもが今日本で受けている教育にギャップがあり、そのギャップがなかなか親に通じない、日本で受けている教育の大切さが親に通じないという問題を抱えている家が結構あります。こういうことでなかなか勉強に集中していないなか、学校の先生たちから外国人の親御さんにフィードバックがあるかという、連絡帳に書いても日本語が読めない、電話をしても夜お仕事をされていて家にいないということで、ほとんどほったらかしの状態になっています。先生もそこまで面倒はなかなか見られないといえます。イギリスやフランスでテロを起こした人たちというのは、もともと親の代から移民をしてきて、そしてその国の文化になかなか慣れなかった、その狭間の子どもたちがいろいろなフラストレーションでテロを起こしたという話を聞きました。ですから、このパートナーシップ、教育というところで、今いる子どもを通じて、親もまちづくりに参加してもらおう。子どもは将来、区も国も支えてくれる人材になっていくでしょうし、日本人の私の子どもにとって、国際的な感覚を身に付けるためにも大事なパートナーです。そのようなかたちで台東区は資源としてたくさんあると思いますから、広い視野で議論していけたら良いと思っています。

○委員

こちらの新しい取組みでされていた中間支援組織について、私の法人も登録させていただいてまして、とても丁寧できめ細かな対応をいただいています。こちらの中間支援組織は平成28年度に開設していますので、今年度動き始めたというところだと思いますが、協働事業数が微増しているなか、まだ途中ですが平成29年度に入ってどのような変化が起きているのか、もしお分かりになるようであれば情報をいただけたらと思います。

○区民部長

おかげさまで、登録している団体も順調に増えております。当然ながら、いろいろな支援を求められて、それに対して個々にいろいろなかたちでそれぞれに対応しています。全体としてどうかと言われると、徐々に拡大しているということになるのですが、なにぶん団体ごとに活動内容が違うので、いかにして協働、あるいはパートナーシップを進めていくかという視点で、われわれもいろいろノウハウを蓄積していきたいと思っています。NPOさんからもいろいろ情報をいただきながら、より良いかたちにしていきたいということで進めております。

<行政経営分野について>

○会長

ありがとうございました。それでは次に行政経営分野ということですが、いかがでしょ

うか。

○委員

区の抱える課題で、大規模用地の活用というところがあります。障害分野に関しては、短期入所、ショートステイの絶対数が足りません。私は相談支援をやっているのですが、要望があれば計画をつくり、区から支給決定がされて、「あなたは1か月で7日間サービスが使えます」という権利のようなものがもらえます。しかし、資源がなく、実際には使えません。毎月1日に次の月の予約をするのですが、電話が集中するため、なかなかつながらない状態が続くということもあります。また、生活介護施設についても、何年も障害福祉計画で取りあげられていますが具体化されません。グループホームも具体化されません。それは全部、建物を建てられないことが原因です。障害の部分で意見は言わせていただくのですが、縦割りを越えた施設づくりを考えないと、どこも絶対に実現しないだろうと思います。

ここに挙がっている大規模用地は、どの分野の方も目を向けていると思います。また、ここに挙がっていない用地でも、去年、谷中の出張所跡地に私たちも手を挙げたのですが、使わせていただけないという結果になりました。今までの例で、高齢と障害と合築で実際に運営をしている社会福祉法人さんがあり、その中に子育て部門も入っていて、割とうまく回っています。先生方もよくご存じだと思うのですが、実際の例でも、障害と高齢と子どもを一緒に合わせて空間をつくると、どこにも良い効果が出ていますので、その辺を踏まえた計画をぜひお願いしたいと思います。

○会長

ありがとうございました。台東区はこのような大規模用地というのは、区域が狭いから少ないわけですが、恐らく今回の基本構想、基本目標に沿ったかたちで、このようなものも活用されていくのではないかと考えています。他にいかがでしょうか。

○副会長

どの区市町村でも、建物を建て過ぎて、とんでもないことになっております。そのような中、これまで議論してきたことを全て積み上げていくととんでもないことになるわけです。今委員からお話があったのはとても良いアイデアで、合築し、しかもきちんと中のものを共用し、効率化して、子ども向け、高齢者向けというのが別の建物である必要は全くなく、また図書館も別に建てる必要はありません。

そもそも、これを言うと、私ども建築学科の人間の首を絞めるのですが、新しい建物を建てる必要はありません。使えるのであれば、古い建物を直して使えば良いのです。ただそのときに重大な問題は、行政にとっては、非常に厳しいことを申し上げますと、例えば教育委員会が所轄している建物は、教育委員会以外が手を出そうとすると、駄目と言われ

てしまうわけです。多摩市で公共施設の運用のお手伝いをしたのですが、多摩市で一番使われていない部屋はどこかという、それは体育館の中の和室でした。それはなぜかという、予約システムでその和室を探し出すためには、まず「スポーツ」を押して、スポーツの中の「会議」を押すと和室が出てくるのです。普通和室は日本舞踊など他のものを使うため、その利用者たちは、スポーツの会議は押しません。結局多摩市は、そこを普通の会議室に直したのですが、むしろ直すべきは実はデジタルシステムのほうでした。それは考えてみると、教育委員会が所轄しているスポーツと、それ以外の普通のコミュニティセンターが所轄している管理のところが別扱いで全部登録されるのです。本当にこれを本気でやろうと思ったら、縦の枠を越えて、使える行政資源は何かを全部横に突っ切ってやらないとならないのですが、恐らく台東区は多摩の自治体に比べて全然困っていないから、まだそこまではやらなくても良いと思われているのではないかと思います。そうしておいたほうが、使っている区民の方も幸せだったりします。例えば多摩市ではコミュニティセンターのお風呂は、一番風呂に誰が入るか暗黙のルールがあり、大混乱のあげくようやく廃止しましたが大変でした。公の施設を効率化して使うというのは、全員が痛みを少し分かち合わないといけません。それができるかというところを、恐らく基本構想で、全員でしないといけないということを言わないといけません。そして初めて、今お話があったような高齢者のための施設、子ども用の施設をきちんと作り出すような余裕が生じてくるはずなのです。いろいろな自治体はそのことを求められています。田舎のほうの自治体では本当にもう支えられないということで、少し腹をくくってやらなければいけなくなっています。台東区は余裕があるうちにそれができると、良いと思います。

○会長

ありがとうございました。行政組織にも踏み込んで構想をつくっていかうということが、恐らくこの審議会を通じてなされるのではないかと考えております。

3. その他

○会長

まだまだご意見があると思いますが、本日のこの案件につきましては、これで終わらせていただきたいと思います。その他につきまして、事務局で何かございますか。

○事務局

— 議事録及び次回審議会についての説明 —

4. 閉会

○会長

ありがとうございました。それでは第4回基本構想策定審議会をこれで終わりたいと思

います。長時間にわたってありがとうございました。

(午後9時00分 閉会)